

進化生物学に基づいた宗教的言説の考察

—新たな形態の創造論とそれを取り巻く諸理論の現状—

藤井 修平

1. はじめに

本論文は、二十世紀末から二十一世紀にかけての進化生物学を取り巻く宗教的言説を考察し、今日の科学的知識を受け入れた際の、宗教が取りうるさまざまな形態を明らかにすることを目的としている。本論文で採用する方法論として、正統的生物学がもたらす主張および神学ないしデザイン論の主張を「宗教についての理論」と「宗教的見解」とに区分せず、全てを「宗教についての言説」として包括的に扱うという手法をとる。その際には、これらの言説を「インテリジェント・デザイン」、「自然の神学・有神論的進化論」、「NOMA」、「価値体系としての生物学」の四つに分類して提示する。そして全ての見解が提示された後に、どういった点をめぐってそれぞれの間の見解の相違が生じているのかを考察する。これにより、主な論点は自然科学が推進する「ナチュラリズム」という姿勢の是非に関するものであり、この姿勢の受け取り方によって宗教と科学の間に対立や協調が生じていることが明らかとなる。そして結論として、ここまでの議論を踏まえて、現代の進化生物学および神学がいかなる状況にあるのかを分析する。本論文で行なう考察は、現代の生物学を取り巻く宗教的言説の現状を理解するための一つの観点を提供することになるだろう。

分析の視点——生物学におけるエポケーの不在

ここではまず分析の視点として、本論文の対象をいかなる角度から扱うかを論ずる。宗教学では、対象から距離をとり、扱っている宗教が正しいかどうかを問わない姿勢が方法論として定着している。いくつかの入門的著作を見るならば、岸本英夫は『宗教学』において宗教研究の諸形態を主観的立場と客観的立場に分類し、自らは客観の側に属する宗教科学的研究を行なうとしており⁽¹⁾、J・キタガワは『宗教学入門』において「宗教学者 *historian of religions* は、諸宗教の『理解』を目的として宗教科学的研究を行なうのであって、宗教学の目的は、決して特定信仰の伝道上の道具となることではない」⁽²⁾と述べ、さらに『宗教学キーワード』では「宗教学は、規範的な学問である神学や哲学のように、真理探究といった思索的目的を持つわけではない」⁽³⁾と、研究の価値中立性が強調されている。また山中弘らの『宗教学入門』では、宗教学は「他者の宗教理解」⁽⁴⁾を目指した分野であると述べられているが、このような捉え方もまた同様の姿勢を生

むものであろう。

こうした姿勢を G・ファン・デル・レーウは「エポケー（判断停止）」と呼んでいる。この語はフッサール現象学から導入したものであり、『宗教現象学』にすでに見られるが⁽⁵⁾、後の『宗教現象学入門』においては「宗教現象学は、一方では体系的であるゆえに歴史とは区別され、他方で当分野は規範的な性格を持たず、その点で神学と区別される……宗教現象学はこれらの価値や真理について判断を下さない。それらを括弧に入れ、その判断を保留する（エポケー）」⁽⁶⁾と、より明示的にエポケーが彼の方法論の中に組み込まれている。

この観点に立つことによって宗教学は神学からの独立性を確保することができるために、レーウの直接の影響を受けていない宗教研究一般についてもエポケーの立場は広まっているといえる。判断停止は科学性を担保するものとしての客観性の主張と似ているように思われるが、これはより消極的な立場である。田丸徳善は、主観と客観の二分法は決定的なものではなく、価値志向的な科学外在的要因の作用は避けられないために、「それを完全に排除することは、机上では可能であっても、研究の実際の遂行においては、おそらく不可能にちかい。可能なのは、せいぜいいわゆるエポケー（判断中止）のみである」⁽⁷⁾としている。

このようにエポケーに類する態度は宗教学の根本的姿勢となっているが、生物学における宗教についての理論には、このエポケーが存在していないという共通点が見受けられる。E・ウィルソンは、「宗教、ドグマ的世俗イデオロギーも含めたそれが、脳の進化の産物であると体系的に分析され、説明されたならば、その力や道徳の外的源泉は永久に失われるだろう」⁽⁸⁾と述べており、ここでのウィルソンの主張は明確に規範的である。さらに M・ルースの著した進化論思想史の著作でも、インテリジェント・デザイン論を自然神学の一種とした上でその誤りを指摘するために一章が割かれており⁽⁹⁾、また T・ディクソンの科学と宗教の歴史に関する著作でも同様の形式の批判がなされている⁽¹⁰⁾。このことは、ここで行なわれていることが単なる記述に留まらず、特定の信仰に対する批判が含まれていることを意味するのであり、これは宗教学の立場から見れば、奇妙なものでさえある。

このような状況は、上述の議論を踏まえればエポケーの不在として理解することができ、ここでは宗教の科学的な記述ないし説明と宗教批判が共存していると考えられる。もちろん一切の価値ないし規範性を排除した研究というものは不可能であり、こうした論述の妥当性が直ちに否定されることはないが、少なくともこれらには価値中立が意図されていないことは明らかである。規範性を制限するというエポケーの役割を考えれば、その不在は規範性の存在する余地を生むのであり、このことは生物学上の宗教を扱う言説に共通する特徴となっている。

ここから、三つの方法論的な示唆を引き出すことができる。第一に、上述の生物学における宗教についての言説に共通する規範性とはどのようなものかということ进行を明らかにする必要がある。第二に、そうした共通の規範性は何らかの記述の偏りを生み出すものであり、それとは異なった、いわば「科学の側から」でない分析は、既存の進化生物学や科学史における研究で見落とされていた点に目を向けることができるであろう。そして第三に、意図的な判断停止が行なわれていない以上は、ここでは「宗教的言説」と「宗教についての理論」を区別する明確な基準が存在しないことになり、そのため両者を同一の水準の下で扱うことが適切であると考えられる。従っ

て本論文では、生物学上の知見との関連で語られる宗教をめぐる主張全てを「宗教についての言説」とし、これまで十全に扱われてこなかった正統進化論と対立する理論である創造論やデザイン論についても考察を行なう。

インテリジェント・デザイン論をはじめとするこうした理論に対する研究は、以下で取り上げるように論争の渦中にある欧米では盛んなものの、日本国内では同理論を推進する団体⁽¹¹⁾によるものや、伊勢田哲治の論文⁽¹²⁾の他にはほぼ存在していないといえる。その点に加えて本論文の特色と呼べるものは、これらの理論が主張する起源論と、正統的進化論によるそれとのどちらが正しいかを判断しようとするのではなく、それらを比較し、それぞれが拠って立つ基盤を明らかにするとともに、その相互の関係性を理解しようと努める点にある。この観点に立つことによって、これまでの研究では看過されてきた要素に目を向けることができるであろう。

2. 進化論と創造論の歴史と分類

以下では先行研究の検討も兼ねて、進化論と創造論の歴史を簡潔に述べてみたい。それにより、本論文で扱う二十世紀後半から二十一世紀にかけての進化生物学上の言説の有する背景が理解できるはずである。

進化論の歴史

進化論の歴史を叙述する際に最も留意すべきなのは、一般的な意味での「進化論」と、狭義の「ダーウィニズム」との区別である。P・ボウラーは『ダーウィン革命の神話』においてとりわけこの差異を強調している。彼によれば、十九世紀末から二十世紀初頭の社会に広く受け入れられた進化論とは、ダーウィンが『種の起源』で示したような見解ではなく、「発展論的進化論」⁽¹³⁾であったという。これは人間や社会が段階的に、前進的に進歩するという世界観であり、ラマルクやヘッケルが推進し、H・スペンサーが人間社会の領域に拡大したものである。その一方で、ダーウィンの提示した進化の仕組みについての主張、すなわちランダムな変異の自然選択による保存という概念は無視された。ルースも『ダーウィンとデザイン』において、「専門的な観点からして、進化は良くいっても二流の試みであった。その前提と結論との間には多くのものが欠けており、その方法論は不適切だった。しかし、もはや十分なものとは言えなくなっていたキリスト教に代わるイデオロギーとして、進化は大成功を収めたのである」⁽¹⁴⁾と述べている。こうした主張は、宗教学の歴史からも裏付けることができる。M・エリアーデは『オーストラリアの宗教』の序文で、十九世紀に特徴的な思想として「進化主義」と「ロマン主義」を対比し、「こうしたイデオロギーはどちらも、アルカイックな宗教の展開は単純なものから複雑なものへの直線運動であると考えていた」⁽¹⁵⁾と述べている。ここからもわかるように、一般的に進歩主義的イデオロギーとして知られている進化論と、現在用いられる「ダーウィニズム」には一定の距離が存在しているのである。

一方でダーウィンの主張は、二十世紀半ばになってようやく認められだした。進化論は遺伝学と結び付き、ラマルク主義的な獲得形質の遺伝の観念を排除することによって、現在正統とされている進化生物学の形態が成立したのである。ボウラーは「現代的総合学説の登場こそダーウィ

ニズムの最初の本当の勝利である」⁽¹⁶⁾と述べているが、現代総合説の成立によって初めて自然選択のみを進化の原動力と理解することになったというのは、進化生物学の歴史として広く語られているものと一致する。

ボウラーの描写する生物学史は、ダーウィンが自然選択のみを認めたとみなしている点や、進歩主義的世界観の発展の原因を進化論にだけ求めている点でいくらか難点があるものの、とりわけ人文科学の分野においては、かつての「進化」と現代におけるその意味するものの差異を明らかにしてくれる点において有意義なものといえる。

米国における創造論の変遷の歴史

次に、米国で進化論と衝突を起こしてきた創造論やデザイン論の歴史を、主に裁判史の面から描写する。本論文では科学の場に現れる宗教的言説、すなわち科学的知識を受け入れた言説のみを対象とするために、古典的な創造論はその範疇には含まれないが、進化論と宗教の対立の歴史を把握するためにも、これを扱うことは有意義だと思われる。

進化論に関する裁判は、1925年のいわゆる「スコープス裁判」が端緒とされる⁽¹⁷⁾。これは、進化論を教えることを禁じるバトラー法に抵触したとしてテネシー州の公立学校教師の J・スコープスが提訴されたというものである。南部の諸州では同様の進化論禁止法がいくつも成立しており、この裁判では進化論の正当性をめぐって論争が行なわれたが、結果的にはスコープスに有罪が言い渡され、控訴審での手続き上の不備によりこの裁判は無効となった。その後、進化論禁止法は1968年のエパーソン対アーカンソー州裁判を皮切りに、合衆国憲法修正第一条で禁じられている「国教の樹立」にあたるとして徐々に廃止されていった。E・スコットによれば、これにはソ連によるスプートニク打ち上げなどの出来事が米国の科学技術の遅れの自覚をもたらし、冷戦下の状況で科学重視の教育方針がとられたという背景が存在している⁽¹⁸⁾。

こうして公立学校での進化論教育の制限は解かれたが、1970年代には H・モリスらによる、聖書の記述が正しいことを科学的に検証する「創造科学」運動が起こった。創造科学は自らが進化論と同水準の科学であると主張し、公立学校の生物学教育カリキュラムにおいて進化論と創造科学を等しい時間教えらるべきとする「授業時間均等化」を認めさせる活動を行なった。均等化法はアーカンソー州とルイジアナ州で州法として成立したが、これらを違憲とする裁判が起こされ、アーカンソー州では1982年に、ルイジアナ州では87年に同州法は廃止された。この一連の裁判は「第二次スコープス裁判」と呼ばれている。

この結果、創造科学は公立学校で教えるに値する科学ではないという法的根拠が得られたものの、1990年代にはさらにインテリジェント・デザイン⁽¹⁹⁾ (ID) 論が現れた。IDについては次章で詳述するが、これに対してもペンシルベニア州ドーバーの教育委員会が ID の教科書である『パンダと人間について』を採用した件について裁判が行なわれ、2005年のキッツミラー対ドーバー裁判で ID を公立学校の生物学の時間に教えることは違憲であるという判決が下された⁽²⁰⁾。

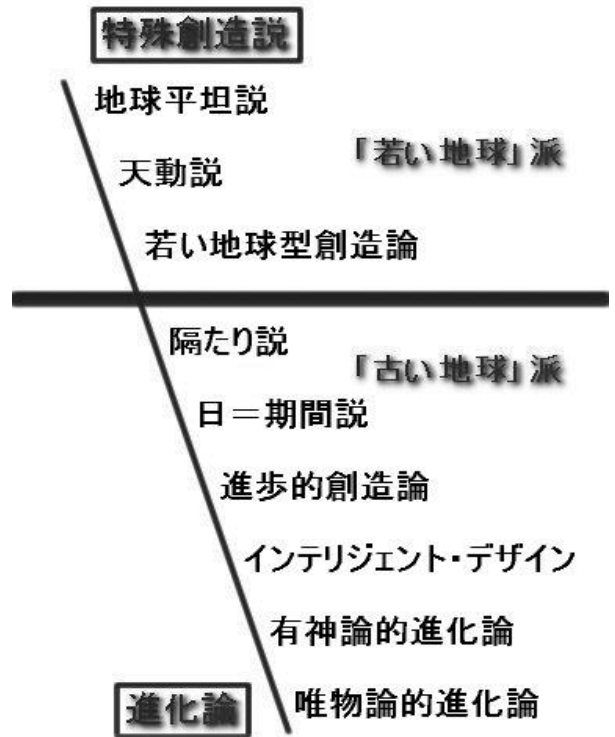
以上が、進化論に関係する裁判の一般的な歴史である。ここで述べた推移からは、進化論は創造論に対して裁判で常に勝利してきたように見えるが、こうした見方は幾分一面的といえる。鶴浦裕の『進化論を拒む人々』によれば、88年には創造科学を推進する創造研究所が運営する大学

院の州認可がカリフォルニア州教育局によって取り消されたが、四年にわたる裁判の後に、この決定は覆された。さらに、同州のサンフランシスコ州立大学では、93年に生物学教授 D・ケニオンが創造論を教えたとして授業の担当を外されるという事件が起こった。この人事は学問の自由をめぐる論争を巻き起こし、最終的にケニオンは授業に復帰することになった。鶴浦はこの事件について『学問の自由』を盾にした創造論側につけ込まれ、生物学科自身が意外な譲歩を与えてしまった。これこそ、創造論側の最大の収穫であり、今回の事件の結末が他の場合ときわめて異なる点である」⁽²¹⁾と述べている。

この二つの事件を生物学と創造論との闘争史に付け加えるならば、宗教に対する科学の勝利という見方は単純すぎるものであることが理解できる。さらに、鶴浦もこれらの主張全てを「創造論」として一括しているが、進化論に挑戦する裁判が複数の時期にわたって繰り返行なわれていることから明らかなように、創造論とされるものの間にも差異が存在するのであり、その差異を認識することが必要である。

本論文で扱う対象の二種の分類法

そこで、本論文で扱う宗教についての言説の把握のために、スコットとバーバーによる分類を提示する。創造論の分類については、創造論運動対策のための組織である全国科学教育センター (NCSE) の所長 E・スコットによる一覧表が参考となる(右図)。この表の上下の位置関係は主に今日の科学的知識をいかに受け容れるかの度合いによって配列されており、「若い地球 young earth」派と「古い地球 old earth」派との間の境界線が最も大きな差異である。スコットの記述によれば、前者はこの地球がわずか数千年前⁽²²⁾に誕生したと主張しており、後者は地質学が算出する地球の年齢を認める立場である。さらにこの中でいくつか説明を要するであろう主張の解説をするならば、古い地球派に属する「隔たり説 gap theory」は聖書の創世記第一章第一節と第二節の間に時間経過があり、その間に一度生物が滅ぼされたとするものであり、「日＝期間説 day-age theory」は創世記第一章の「一日」が現在の日ではなく、より長い期間や時代を表現する語であったとするものである。また「進歩的創造論 progressive creationism」とは、神は生物の「種」を創造したのであり、種の範囲を超えない進化ならば認めうとする立場である。この表によれば、創造科学と ID の間には大きな隔たりがあることが明らかとなる。創造科学は「若い地球」



Scott, 2011, p. 141. より翻訳

派に属するのに対し⁽²³⁾、ID は「古い地球」派であり、唯物論的進化論ともそれほど隔たっていない。この見解は別の観点からも支持される。「若い地球」派が大学にその地位を築くことができている一方で、ID を主張する著作は学術的な水準を満たし⁽²⁴⁾、大学教員の中にも支持者が現れ始めている。前述のケニヨン教授も ID 運動の創始者の一人であった⁽²⁵⁾。こうして、ID 論に至って初めて「創造論」とされるものが科学の規範の下で展開することが可能となったといえる。一方、ID に対しては科学と神学の双方から批判が行なわれており、その中には ID 以外の方法で進化論とキリスト教を調和させようという「有神論的進化論」の試みも存在する。

もう一つの分析のための視点として、物理学者でありかつ神学者でもある I・バーバーが『科学と宗教が会おうとき』で論じている、科学と宗教の関係についての四つの姿勢を提示する。その内訳を述べると、科学と宗教の闘争は不可避だとする「対立」の姿勢、科学と宗教は扱う対象も目的も異なるという「独立」の姿勢、宗教は科学的知識を受け容れ、科学が提起する問いに答えていくべきだとする「対話」の姿勢、そして宗教と科学は協力し合い、最終的に同一のものとなるという、バーバー自身も支持している「統合」の姿勢である。これらの類型間の差異は明瞭ではないが、本論文で取り上げる対象の把握のためにはこの類型は一定の役割を果たすと考えられるので、そうした差異に留意しながらこれを用いることとする。

3. 生物学と関連した宗教についての言説

以下では、科学の知識を受け容れた宗教理論の現状を明らかにするために、インテリジェント・デザインに加えて、バーバーの類型では「独立」とされる NOMA と、「統合」とされる有神論的進化論を扱う。さらに「対立」の姿勢から宗教を批判する唯物論的生物学にもまた宗教的要素が見出されるということも事例として取り上げる。

インテリジェント・デザイン

インテリジェント・デザイン論の端緒は、一般には 1989 年に「思想と倫理財団」から刊行された高校生向けの生物学の副読本『パンダと人間について』であるとされるが、その後生化学者 M・ベーエと数学者 W・デムスキーの著作によって ID の議論はさらに拡大されることとなった。ルースは、ベーエの『ダーウィンのブラックボックス』は英語版だけで二十万部以上が売られたと述べているが⁽²⁶⁾、同書によると ID 論を構成する論理は以下の通りである。まず、ベーエは生物の各組織が非常に複雑であり、かつ合目的、すなわち高度に専門化された特定の機能を果たしていることを示す。そのため、こうした組織はダーウィニズムが主張するような段階的な変化によって生み出されることは「ありえない improbable」ものである。ベーエはこれを「還元不能な複雑性 irreducible complexity」と呼んでいる。これは知性を持った主体のデザインを原因とする以外に説明のつかないものであり、それゆえ生物の組織が誕生するためにはそれを設計した存在がいるに違いないことが推測される。こうして、以下のような結論が導かれる。

知性の働きではない原因だけに研究を制限すべきだという義務感を感じない人は、多くの生化学のシステムはデザインされたものだという結論に直行するだろう。自然法則や偶然や必

然性によって出来たのではなく、計画されたのである。デザイナーはそれらのシステムの完成図を知っていて、そのシステムを生み出すステップを踏んだ。地球上の生命は、もっとも根源的なレベルにおいて、もっとも重要な構成要素において、知的活動の産物なのである。(27)

デムスキーはこれに加え、どの程度まで複雑であればデザインの証拠といえるかの基準を示す「特定された複雑性 *specified complexity*」の概念を導入し、ID は科学でないとする批判に対しては、犯罪捜査や暗号学は何らかの主体の意志が介在した痕跡を特定するものであり、これらが科学であるのと同様、ID も科学であるという主張を行なっている(28)。

ここで注目すべきなのは、「インテリジェント・デザイン (ID) は知的な原因を探求する科学的リサーチ・プログラムである……ID はデザインを行なう知性の問題にまで踏み込むことはしない」(29)とデムスキーが述べているように、彼らの著作や、『パンダと人間について』の改訂版である『生命のデザイン』(30)では、一貫して科学的知識のみが記述され、聖書や神などへの言及は一切行なわれていない点である。ID の見解に沿った議論のより身近な例を挙げるならば、ものみの塔聖書冊子協会(エホバの証人)の刊行している『目ざめよ!』では、「だれかが設計?」という記事が定期的に掲載されており(31)、ここでは生物の複雑な機構が紹介された後に、これらは「進化によって生じたのでしょうか。それとも、だれかが設計したのでしょうか」(32)と問いかけている。ここからもわかるように、ID 論は純粹に科学的な知識の末尾に、その解釈としてダーウィニズムではなくデザイン論を付加することによって成り立っている。

ルースは ID とダーウィニズムの関連性を描写するために、「複雑性に向かう議論」と「デザインに向かう議論」という用語を用いている(33)。前者の、生物の組織は複雑かつ合目的であるとする議論はダーウィニズムとも共通するものであるが、その根拠として何者かのデザインを認めるかどうかで、両者の立場は分かるとされている。「ダーウィンは複雑性に向かう議論を認めた。しかし彼は、デザインに向かう議論を永遠に変えてしまったのである」(34)と述べられているように、ダーウィニズムは生物の複雑さの原因を自然選択によって説明するのに対し、ID はそれを神によるデザインによって説明する点に差異が見出されるのである。

ID は、人工物に製作者が見出されるように、自然物に対してもデザイナーの存在が見出されるとした W・ペイリーに代表される、かつての自然神学の現代版であるとしばしば言われている。しかし、上述の「複雑性に向かう議論」を経て「デザインに向かう議論」を行なっているという点ではペイリーと ID 論は共通しているものの、ID は人工物からの類比は避けており、さらにペイリーの時代とは異なり、自然選択による小規模な進化は認めている。『生命のデザイン』では「抗生物質の耐性を発達させるバクテリアは、進化が進行していることをまさに例証しています。しかしこれは小規模な進化(小進化)であり、これに異論を唱える人はおらず、進化生物学の本来に大きな主張とは無関係のものです」(35)と述べられており、これに対して新たな形質の発達などの大進化はダーウィニズムでは説明できないとしているのである。これは現代の進化生物学の上げる成果を無視することなく、ID の立場を維持することが可能であることを示している。

自然の神学・有神論的進化論

インテリジェント・デザインが徐々に普及している一方で、伝統的な神学の枠内の議論でも、進化生物学の知識とキリスト教を調和させる試みが行なわれている。生物学に留まらず、科学的知識全般を積極的に自らの神学に取り入れようとする新たな動きの一つに、「自然の神学 *theology of nature*」がある。これはバーバーによる用語であり、「自然の神学は、宗教的体験と歴史的啓示に基づいた宗教的伝統から出発する。けれども自然の神学は、現代科学を考慮に入れて、若干の伝統的教義を再構成する必要があると考える」⁽³⁶⁾と述べられているように、従来の「自然神学 *natural theology*」とは異なり、特定の宗教的伝統から出発し、かつ科学的知識に基づきその教義に修正を加えるという点が強調されている。以下では、両者の差異を明確にするために、このような動きの中でとりわけ進化論から大きな示唆を得ているピーコック、ホートおよびコンウェイ＝モリスの主張を挙げる。

英国国教会の司祭でありかつ生化学者でもある A・ピーコックは、『科学より神にいたる道』で、科学的知識と伝統的神学を調和させる方法を模索している。バーバーの分類ではこの姿勢は「統合」に属するものである。ピーコックは神を「全てを包含し、全てに浸透しているが、神の存在はそれ以上のものである」⁽³⁷⁾という「万有内在神論 *panentheism*」的な視点で捉えており、また「神は自然的秩序の過程を通して創造する、内在的創造主である」⁽³⁸⁾として、生命進化の過程もこの秩序の中に含めている。自然淘汰は本来的に偶発的な過程であり、そこには生物の競争や絶滅が内包されているという神義論的問題については、神は自ら望んでこの自由な過程をもたらしたのであり、その結果生まれる悪に苦しむとしている。これが「創造は神にとって、明らかに危険で犠牲の大きい冒険であった」⁽³⁹⁾と述べられている理由である。加えて、ピーコックは神の世界への介入という伝統的な思想を物理法則を破ることなく可能にするために、神は世界のシステムに全体論的に影響を及ぼすとみなしている。これは「トップ・ダウンの原因としての神」⁽⁴⁰⁾と呼ばれる観念で、神はシステム全体に作用するためにその内部の法則と矛盾することはなく、神の活動の痕跡は特定の形式の出来事として現れるという。ピーコックの神学は、既存の神学的概念の多くを科学的見解と衝突しないよう修正する試みだと理解でき、信仰を確証するものとして科学的知識を用いない点が、これまでの自然神学との差異だと言えるだろう。

一方で、カトリック神学者の J・ホート⁽⁴¹⁾が『キリスト教と科学——自然の神学にむけて』において示す見解では、科学と神学の領域が完全に重複するとはしていない。彼は、神学が科学にはない長所を有しており、科学では答えられない問題を扱っていると論じている。これは、バーバーの四分法では「対話」に分類するのにふさわしい立場であると考えられる。ホートが強調するのは、神学が科学とは異なり未来への希望を提示できるという点である。科学が予言するのは宇宙の最終的な崩壊のみであって、「自然科学は、過去の単純な因果系列から現在の現象を理解するという方法論ゆえに、いかなる完成の約束も知ることができない」⁽⁴²⁾のに対して、神学は神の約束に宇宙が支えられているという確信を与えるとされている。またホートは「神の自己限定（ケノーシス）」という概念を重視する。これは神が全能性を自ら制限することによって世界に偶然性を許すというものであり、「神の自己限定する愛のみが、事物に存在する自由を与えることができる」⁽⁴³⁾と述べられている。その結果として存在することになる自然悪に神が苦しむとし

ている点はピーコックと共通しており、神が時間性を有するものとして存在しているゆえに、宇宙は現在も生成の過程にあり、それは「いまだ書き続けられている書物」⁽⁴⁴⁾であると描写されている。こうした神と世界の時間の内での相互作用という観点からは、A・ホワイトヘッドのプロセス神学との関連が見られる。

また、伝統的な神学とは別の角度から進化論と宗教の関係を扱っている人物が、古生物学者 S・コンウェイ＝モリスである。彼は『進化の運命——孤独な宇宙の必然としての人間』において、膨大な数の「収斂 convergence」の事例を提示している。収斂とは、二つの種同士が近縁ではないにもかかわらず、環境への適応によって類似した形質⁽⁴⁵⁾を生み出す事象である。ここでは「収斂がこれだけどこでも見られ、またその大部分が適応という文脈で働く選択プロセスの結果であることがほぼ確実だとするなら、通常の進化の行き先には、そこへ向かう限定された道すじがあると見えよう」⁽⁴⁶⁾と述べられている。コンウェイ＝モリスの意図は進化が特定の方向に向かって導かれており人間の出現には必然性があることを示すという、テイヤール・ド・シャルダンに類する主張を行なうことにあると推測され、これに続く論文「ダーウィンのコンパス」⁽⁴⁷⁾においては、

創造は、われわれの知る限り、豊かさと可能性において無限であり、この真理を発見できる道は多くあるが、科学もその一つであり、ある場合ではわれわれの持ちうる唯一の道であると考えてはいけない理由はない。事実、科学は創造がわれわれの予期するよりもはるかに素晴らしく、並外れておりかつ多様であることに気付かせてくれる。⁽⁴⁸⁾

と、進化論はキリスト教信仰を深めるものであることが主張されている。

以上に示したことから、ピーコックやホートのように神学を進化論などの科学的知識を用いて再解釈することも、コンウェイ＝モリスのように進化論をキリスト教的に再解釈することも可能であり、進化論とキリスト教信仰は必ずしも両立できないものではないということが明らかとなる。

NOMA

進化論とキリスト教信仰の両立は、また別の形でも達成することができる。以下では科学と宗教は互いに独立しており、それゆえ対立はあり得ないという、バーバーの分類では「独立」に属す立場を扱う。その典型例が、古生物学者の S・グールドが提唱した「NOMA」である。

グールドは『神と科学は共存できるか？』において、宗教と科学の関係について、「NOMA (Non-Overlapping MAgisteria: 重複しない教導権)」という見方を推進している。これは、科学は経験的な領域、宗教は究極的な意味と道徳的価値の問題を扱うものであり、扱う対象が異なっているがゆえに両者は対立せず共存可能であるとする見解である。彼はこの状況を「ふたつの、それぞれ人間の存在の中心的な側面を担う別個の主体のあいだの、密度の濃い対話を伴う非干渉」⁽⁴⁹⁾と表現しており、さらに「NOMA とは、道徳的および知的な基盤をもつ原理的な立場であって、たんなる外交的な解決策ではない」⁽⁵⁰⁾と述べている。さらに、サラマンカ大学で神学を

学んだ生物学者である F・アヤラも『ダーウィンの贈り物』において NOMA を支持し、「正しく理解されるのであれば、それらが対立することはありえない。なぜなら科学と宗教は重複しない知の領域を扱っているからである」⁽⁵¹⁾と述べている。アヤラはその根拠として教皇ピウス十二世の回勅や米国科学アカデミーの意見書を挙げ、NOMA の立場が広く認められていることを示している。

もし、グールドが述べているように NOMA は政治的な妥協案ではなく、宗教と科学の実際的な関係を描写したものであるならば、科学と宗教の対立に見えるものは全て政治的な対立か、特定の宗派同士の対立だということになる。これに加えて、現在の科学史上の展開も NOMA の立場を後押ししている。松永俊男の『ダーウィンの時代』では、かつての科学史は、科学が宗教に対して挑戦を行い、勝利したという「闘争テーゼ」に偏向しており、現在ではこれに対しピューリタニズムが科学の発展に貢献したという「マートン・テーゼ」および英国国教会の広教主義派が科学研究を推進したという「広教主義テーゼ」に置き換えられているという。松永俊男の『ダーウィンの時代』によれば「近年の実証的な科学史研究により、現在では闘争テーゼが完全に否定され、近代科学がキリスト教に深く根ざしていたことは疑いないものとなっている」⁽⁵²⁾とされ、グールドもこうした見解を支持している⁽⁵³⁾。これはあくまで一つの歴史記述であり、今後の科学と宗教の関係を予測するものではないが、グールドがこれを自説の補強に用いていることからわかるように、近代科学は「本来」キリスト教と相容れないものではないという主張を可能とするものである。

価値体系としての生物学

創造論の一部やインテリジェント・デザインがダーウィニズムを否定するのに対し、ダーウィニズムの立場からも、宗教の有用性や必要性を否定する立場が存在する。両者は共に「対立」に分類されるものであるが、その方向は正反対であるといえる。以下では、後者の主張の中から、とりわけ生物学が宗教の機能を果たすという点が強調されている記述を提示する。

ダーウィニズムに対する反発はしばしば、もしダーウィンが正しければ人生の意味や道徳は存在しなくなる、という形をとる⁽⁵⁴⁾。このような主張が行なわれれば、それへの反論として、宗教に頼らずに、自然科学のみから道徳や倫理を導き出すことは可能である、という見解が生まれても驚くにはあたらない。ドーキンスの『虹の解体』はまさにその意図の下に書かれた著作であり、同書では、

科学がもたらす自然への畏敬の気持ちは、人間が感得しうる至福の経験のひとつであるといつてよい。それは美的な情熱の一形態であり、音楽や詩がわれわれにもたらすことのできる美と比肩しうるのである。それはまた、人生を意義あるものにする。⁽⁵⁵⁾

と、自然科学が価値体系の役割を果たしうるということが主張されている。彼は同書で「詩的科学」がいかにか「畏敬の念 sense of wonder」を呼び起こさせるかを説き、そうした学問を科学的な誤りに基づく「偽りの詩」と区別している。ドーキンスはさらに『祖先の物語』の末尾でも、地球上

の生命の示す「実在の世界の崇高な威厳」に畏敬の念を見せ、「自らを宗教的と呼ぶ多くの人が、私の意見に同意してくれるのではないかと思っている」⁽⁵⁶⁾と述べている。C・テイラーはこうしたドーキンスの姿勢を、「この畏敬の念、自分が自然の一部となっていることに対して見せる敬虔さは、ナチュラリストであること、すなわち内在主義的な視点と共存可能なだけでなく、それを支持する」⁽⁵⁷⁾のものであり、その敬虔さは宗教になりかけていると述べている。

加えて社会生物学の提唱者である E・ウィルソンは、人間は本能的に生命やそれに似た過程を好むとしており、この傾向を「バイオフィリア」と呼んでいる上に、このバイオフィリアが宗教と同等かそれ以上の価値を有していると主張している⁽⁵⁸⁾。そしてダーウィン自身も『種の起源』の終結部を自然への賛美で締めくくっているのである。「生命はそのあまたの力とともに、最初わずかのものあるいはただ一個のものに、吹きこまれたとするこの見かた……かくも単純な発端からきわめて美しくきわめて驚嘆すべき無限の形態が生じ、いまも生じつつあるというこの見かたのなかには、壮大なものがある」⁽⁵⁹⁾というこの終結句は、その一部をグールドが『ナチュラル・ヒストリー』誌に連載していたエッセイの標題として用いており、またドーキンスの『進化の存在証明』の第十三章は、この箇所を取り上げて節ごとの注解を加えることに費やされているなど、あたかも聖句であるかのように重要視されている。このような状況は、生物学における自然が価値の源泉となることが少なくとも可能であることを示している。

4. 神学的論点の所在

この章では、これまでに挙げた宗教についての言説の間で、いかなる論点をめぐって対立が起こっているのかを明らかにする。そのための視点として、ジョンソンによる見解を提示し、彼が批判した「ナチュラリズム」に対するいくつかの見解を取り上げる。

ジョンソンによる考察——ナチュラリズムと有神論の対立

法学者であり、自らを「哲学的有神論者かつキリスト教徒」⁽⁶⁰⁾と呼んでいる P・ジョンソンは ID 論成立の一端を担った人物だと目されているが⁽⁶¹⁾、彼は著書『ダーウィン裁判』および『均衡のとれた理性』において、ダーウィニズムをはじめとする科学は全て「方法論的ナチュラリズム methodological naturalism」という前提を共有していると指摘している。この語は研究に対して超自然的原因による説明を持ち込まないという姿勢を表しており、

方法論的ナチュラリズム (MN) はこれまで現代科学において非常に支配的な地位にあり、無神論的唯物論者や、不可知論的ナチュラリスト、さらには有神論的進化論者にほとんど例外なしに承認されている。科学における MN は宗教における有神論とはただ表面的のみに調和しうるにすぎない。MN が深く理解されれば、有神論は知的に支持できないものとなる。⁽⁶²⁾

と述べられている。ナチュラリズムは理性に基づいているとされ、一方で宗教は非合理の同義語となっているとジョンソンは主張し、「何が究極的な実在であり、何がそうでないかということに関する特定の視点を主張するという点において、ナチュラリズムは形而上学的な原理である。

ナチュラリズムに従えば、究極的に存在するものは自然である」⁽⁶³⁾と述べており、そのため彼はナチュラリズムを「アメリカの国定宗教哲学」と呼んでいる。こうした意味でのナチュラリズムは、旧来の「唯物論」の意味するところと類似しているが、物質対精神という対立項ではなく、自然対超自然という二元論を強調するために彼はこの語を用いていると考えられる。そのような差異があるにせよ、ジョンソンの主張は唯物論批判の流れの一つに位置付けることができるだろう。

ナチュラリズムが宗教的哲学だとするジョンソンの姿勢は、「創造科学は生物進化論と同じくらい科学である。そして生物進化論は創造科学と同じくらい宗教である」⁽⁶⁴⁾とするモリスの主張と類似しているが、ジョンソンは創造科学や ID を明確に支持してはおらず⁽⁶⁵⁾、その意図は有神論全体が陥っている危機を指摘することにある。ジョンソンは、ナチュラリズムを受け容れるならば、「この出発点は必然的に、その含意を理解しようとしまいと、神のための場所は想像の世界か、『ビッグバンの特異点』以前にしかなくなることを示唆している」⁽⁶⁶⁾と、ナチュラリズムが有神論の信仰を不可能にすると主張している。これと同様の見解を、正反対の立場である R・ドーキンスが示していることは興味深い。彼は『神は妄想である』において、グルードの唱える NOMA への批判として、

グルードに従って宗教を徹底的な非介入の形態に切り詰めてみるとしよう。すなわち奇跡なし、どちらの方向であるを問わず、神との対話もなし、物理法則をもてあそぶことなし、科学の芝生に侵入することなしである。そうすると、この神が行えることはせいぜいのところ、時間の経過に従って星々、元素、化学物質や天体が発達し、生命が進化するような宇宙の初期状態に対する小さな理神論的入力にすぎない。⁽⁶⁷⁾

と述べ、NOMA の原則に十全に従ったならば選択肢は理神論しか残らず、宗教には彼の言う「NOMA 神」の信仰しか許されないことになるとしている。ジョンソンとドーキンスに共通する論点は、科学的知識ないしナチュラリズムを受容することによって、許される宗教的信仰の範囲に厳しい制限がかけられるということであって、これは前章で挙げた有神論的進化論の例からも理解できる。ここで取り上げた自然の神学は厳密な理神論は避けているものの、伝統的見解を科学的知識に基づいて修正する試みが行なわれているのである。一方で ID の下ではデザイナーは人格を持つことも、奇跡的介入をすることも可能だとされており⁽⁶⁸⁾、これはジョンソンの希求する有神論と合致するものであるために、この点から考えればジョンソンは ID に対する暗黙の支持を行なっていると考えるに十分である。

ナチュラリズムについての議論

ジョンソンが提示している「方法論的ナチュラリズム」の概念は、本論文で述べたような生物学における宗教言説の現状をよく説明するもののように思われる。ジョンソンの主張の要点は、ダーウィニズムが単に宗教であると述べるのではなく、それが前提とするナチュラリズムが一つの世界観を構成しているとし、そのためナチュラリズムと有神論は競合するとみなしている点に

ある。こうした文脈でのナチュラリズムという用語自体はジョンソンの考案によるものではなく、ウィルソンが「科学的ナチュラリズムは、心の過程自体を定義しなおすことによって、社会学者や人文学者、神学者の組織的研究を必ずや根底から変化させてしまうよう定められていることを、彼らは認めざるを得ないだろう」⁽⁶⁹⁾と述べているなど、この語は生物学者の間で同様の意味で用いられている。

ジョンソンのナチュラリズム批判は、神学的観点と進化論への理解の双方においてそれと相容れない立場である有神論的進化論者の間でも部分的な支持を受けており、ホートも「ナチュラリズムは、今日の科学者、哲学者集団における支配的な信念体系となっている」⁽⁷⁰⁾とこれに批判的な態度をとっているほか、宗教的哲学者 A・プランティンガは『対立の本当の所在』において、ジョンソンと同様に断固としてナチュラリズムに反対している。プランティンガは同書で、ナチュラリズムが擬似宗教となっているだけではなく、それは有神論どころか、科学とすら相容れないという、驚くべき主張を行なっている。彼によれば、もし人間が自然選択の産物ならば、「これらの生物が生き延びて進化したという事実、彼らの認知的装置は彼らの祖先が生存と再生産を行なうに十分であったという事実、彼らの信念の正しさや認知的能力の信頼性については何も語らない」⁽⁷¹⁾、すなわち人間が判断する物事はそれが正しいゆえに選び取られるのではなく、それが自らの生存に寄与するゆえに選び取られることになるのであり、人は自らの認識が正しいことを正当化できなくなる。こうしてナチュラリズムは認識論的な相対主義をもたらすのである。ここから、『科学的世界観』と呼ばれるに値するものはナチュラリズムではなく、有神論である⁽⁷²⁾という結論が導かれる。彼はジョンソンの批判を引き継いでいるだけではなく、科学においてもナチュラリズムは誤りであると主張することで、さらに先へと進んでいる。その上プランティンガは ID を好意的に評価しており、「現代のダーウィニズム的生物学はベーエのデザインへの信念、そのような細胞構造がデザインされたものであるという信念を切り崩すような反証を提供しているのだろうか。その答えは明らかに『否』である」⁽⁷³⁾と ID がキリスト教信仰を支持する有用な手段であることを認めている。同様に、伝統的な宗派の神学者が ID に賛同する例もある程度見られる⁽⁷⁴⁾。

こうした見解に対し、哲学者 E・ソーバーはジョンソンによる批判について、「科学は方法論にコミットしているものであり、世界がどのようなでなければならないかについての実質的な主張にコミットしているわけではない」⁽⁷⁵⁾と述べているが、方法論として成立した科学も、何らかの価値を生み出す体系となることが可能なことは、前章の分析からも明らかである。第一章で扱った生物学におけるエポケーの不在と結び付いている規範性も、このナチュラリズムに由来すると考えることができる。実際に、米国の大学の自然科学系学部では創造論を支持していることが判明した大学院生の学位が取り消され、同様に教員の昇進が拒否されるなどのハラスメントが起こっていることを鵜浦が報告している⁽⁷⁶⁾。

しかし、他の観点を踏まえるならば、あらゆる分野の科学と有神論が対立するわけではないという点において、NOMA の支持者の主張は正しいと考えられる。問題となっているのは宇宙生成論、生命の起源および進化についてであり、これらは全て起源についての問いだという共通点がある。さらに、有神論的進化論者が述べているように、こうした対立は不可避なものではない、

という見解も考慮すべきだろう。バーバーは科学的唯物論と ID も含んだ聖書直解主義の双方を「対立」に分類しているが、それは両者が「同じ領域（自然の歴史）について、科学と宗教は相容れない正真正銘の言明であるので、どちらかを選択しなくてはならない、と共に主張しているからである」⁽⁷⁷⁾と述べられているように、両者の調停を図る立場からすれば、極端な唯物論者と極端な有神論者が争っているように見えるのだ。彼はこの双方に対して批判的な姿勢をとっている。

5. 結論

以下では結論として、現在の進化生物学とそれに関連する宗教的見解の現状を包括的に把握することを試み、また、それを元に今後の研究のための方法論的観点を提示する。

科学と神学の現状の分析

現在の進化生物学は、自然科学としては特異な状況にあるといえる。それは、学問内での変化が直接社会状況の変化へと結び付くため、社会に対して価値中立ではなくなることを余儀なくされているという点である。グルードによる現代総合説の批判をジョンソンが進化論一般への反論として取り上げていたり⁽⁷⁸⁾、N・チョムスキーによる人間の言語能力の独自性の主張を ID が取り上げていたり⁽⁷⁹⁾、生物学の内部からであれ外部からであれ、正統理論たる現代総合説に対する批判は結果的に進化論に反対する宗教勢力を利することとなっている。これは、現代総合説に対する批判および自然科学一般への批判と創造論や ID 論とが、共にダーウィニズムを批判しているという点において、間接的な協力関係に置かれているということを意味している。また、このことは進化生物学の学説上の議論と神学的議論が結び付いていることも示しており、従って現状では科学と宗教ないし道徳の議論が切り離されてはおらず、全ての議論が連鎖しているといえる。これは、ジョンソンが述べるように進化論が単純に宗教やドグマとなっているのではなく、上述のような状況に必然的に引きずり込まれているのだと考えられる。こうした理解を踏まえれば、進化生物学内の理論の拡張の傾向と、進化生物学内における言説が「ポストモダン」に対する断固たる批判姿勢をとっていること⁽⁸⁰⁾も説明できる。というのも「ポストモダン」の提示する自然科学批判に対して一步でも譲歩すると、「外敵」である創造論や ID 論に有利に働くために、学問内部での結束が揺るがないようにする必要があるからである。この分析は、第一章で提示した方法論上の観点とも調和するように思われる。現在は進化論とそれに関係する宗教的理論は同一平面上にあると考えてよく、それらを一括して扱うことは宗教研究にとって意義のあるものだろう。

一方、ダーウィニズムを受け容れた神学は、唯物論的進化論と ID との間で板挟みになっているといえる。ナチュラリズムは認められないとする見解はほぼ一貫して見られるが、進化論と ID のどちらに歩み寄るかで立場が分かれている。テイラーは『世俗の時代』の中で科学の発展が「摂理的理神論」をもたらし、それは二十世紀以降にはさらに拡大していると述べているが⁽⁸¹⁾、ダーウィニズムの肯定はまさにこの一例となり、結果として理神論や万有内在神論に近づくこととなる。このような姿勢を拒否する場合は、とりわけ ID 論が有神論を保持しつつも科学的知識を解

積するための手段として有用なものとなる。ID や有神論的進化論は共に、今日の社会において大きな位置を占める科学的知識を無視することなく成立しているために、他の形式の創造論に比べその支持を大きく失う見込みは低く、今後もその勢力を保つであろうことが推測される。

宗教学の果たしうる役割について

最後に、これまでに分析した内容を踏まえ、今後の研究の可能性について考察を行なってみた。本論文の冒頭で提示した観点から見れば、これら全ての姿勢には欠けているものがあるということが明らかとなる。どの見解の支持者であれ、そこに存在しているものは「偶然か知性か、二つしかありません」⁽⁸²⁾といった主張に典型的な科学か宗教かという二元論のみであって、両者のどちらにも属さない第三の立場というものは一切考慮されていないのである。第一章で述べたエポケーは、この第三の立場を成立させるに十分なものであり、これにより独自の視点からの主張がなされるように思われる。だが、おそらくこの方針には完全なエポケーが可能であるかという問題が存在しており⁽⁸³⁾、方法論としてのナチュラリズムが一つの世界観を構築しているように、最終的に行ないうるのは客観的分析でもエポケーでもなく、「他者理解」のみになるかもしれない。そうだとすると、科学と宗教が邂逅する分野においてこのような姿勢が一定の役割を果たしうる見込みは高いと考えられる。

加えて、これまでの宗教概念批判の文脈では、宗教に協力的な「神学」と価値中立的な「科学」との二分法によって議論されており、もう一つの極である「宗教批判」の存在に目が向けられることはなかった。本論文で取り上げたナチュラリズムはまさにこの姿勢の一例なのであり、この観点も踏まえて同様の文脈を再検討するならば、また新たな見地がもたらされるのではないだろうか。

註

- (1) 岸本英夫『宗教学』, 原書房, 2004年, 9頁。
- (2) Mircea Eliade, eds. with Joseph Kitagawa, *The History of Religions: Essays in Methodology*, The University of Chicago Press, 1959, p. 28.
- (3) 島菌進, 葛西賢太, 福嶋信吉, 藤原聖子編『宗教学キーワード』, 有斐閣, 2006年, 189頁。
- (4) 棚次正和, 山中弘編著『宗教学入門』, ミネルヴァ書房, 2005年, 141頁。
- (5) Gerardus Van der Leeuw, *Religionsphänomenologie*, 2nd ed. J.C.B.Mohr, 1956, p. 640.
- (6) Gerardus Van der Leeuw, *Einführung in die Phänomenologie der Religion*, 2nd ed. Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, 1961, pp. 2-3.
- (7) 田丸徳善『宗教学の歴史と課題』, 山本書店, 1987年, 26頁。
- (8) Edward Osborne Wilson, *On Human Nature*, Harvard University Press, 1978, p. 201.
- (9) マイケル・ルース『ダーウィンとデザイン——進化に目的はあるのか?』, 佐倉統, 土明文, 矢島壮平訳, 共立出版, 2008年, 299-322頁。
- (10) トマス・ディクソン『科学と宗教』, 中村圭志訳, 丸善出版, 2013年, 123-156頁。
- (11) 現在国内では世界基督教統一神霊協会(統一教)系の団体である世界平和教授アカデミーが

- 「創造デザイン学会」を主催し、インテリジェント・デザイン論を推進している。
- (12) 伊勢田哲治「科学哲学からみた『知的設計』説」、『日本の科学者』, 41(11), 2006年。
- (13) ピーター・ボウラー『ダーウィン革命の神話』, 松永俊男訳, 朝日新聞社, 1992年, 4頁。
- (14) ルース, 前掲書, 129頁。
- (15) ミルチャ・エリアーデ『アルカイック宗教論集』, 奥山倫明監修, 飯嶋秀治, 奥山史亮, 小藤朋保, 藤井修平訳, 国書刊行会, 2013年, 216頁。
- (16) ボウラー, 前掲書, 148頁。
- (17) 以下の記述は, 主にスティーヴン・グールド『神と科学は共存できるか?』(狩野秀之, 古谷圭一, 新妻昭夫訳, 日経BP社, 2007年)を参照した。
- (18) Eugenie C Scott, “Antievolutionism and Creationism in the United States”, In: Sara Fletcher Harding, and Nancy Morvillo eds., *Religion and Science: Critical Concepts in Religious Studies*, vol. 3, *The Imperative of Evolution in Religion and Science*, Routledge, 2011, p. 146.
- (19) この語の訳語に関しては, 「知的設計」, 「知的デザイン」などの表記も見られるが, designを「設計」とすると工学的な意味合いが強くなり, 何らかの主体が意図的に作り上げたという「意匠」の意味が失われるので, カタカナ表記とした。
- (20) Kevin Padian, “The evolution of creationists in the United States: where are they now, and where are they going?” In: *Science and Religion*, pp. 166-167.
- (21) 鶴浦裕『進化論を拒む人々——現代カリフォルニアの創造論運動』, 勁草書房, 1998年, 133頁。
- (22) スコットは詳述していないが, この立場で最も典型的なものは, J・アッシャー大主教が主張した, 天地創造は紀元前四千四年十月二十三日の正午に起こったとするものであろう。
- (23) Scott, *op. cit.*, p. 142.
- (24) 例として, ID論を代表するW・デムスキーの『デザインによる推論』はケンブリッジ大学出版会から刊行されており, これはI・ヴェリコフスキーの『衝突する宇宙』の出版に際してマクミラン社が出版差し止めの抗議を受けたのと対照的である。
- (25) 鶴浦, 前掲書, 114頁。ケニヨンはそのIDの著作とされる『パンダと人間について』の執筆にも参加している。
- (26) Michael Ruse, “Flawed intelligence, flawed design”, In: *Science and Religion*, p. 193.
- (27) マイケル・ベーエ『ダーウィンのブラックボックス——生命像への新しい挑戦』, 長野敬, 野村尚子訳, 青土社, 1998年, 270頁。
- (28) William A Dembski, “Mechanism, magic and design”, In: *Religion and Science*, pp. 184-188.
- (29) *Ibid.*, pp. 182-183.
- (30) この版の著者デムスキーはキリスト教福音派, ウェルズはリチャード・ドーキンス『悪魔に使える牧師——なぜ科学は「神」を必要としないのか』, 垂水雄二訳, 早川書房, 2004年, 388頁によれば統一教に属している。
- (31) 『目ざめよ!』には少なくとも1980年代から動物の生態を紹介する記事が存在しており, そこでは「創造者への畏敬の念を起こさせる」といった自然神学的主張が行なわれていたが, 1997年5月8日号と2006年9月号ではIDに関する特集が生まれ, ベーエに対するインタビューが行なわれている。「だれかが設計?」の記事が初めて登場するのは2008年1月号からである。

- (32) 『目ざめよ!』, ものみの塔聖書冊子協会, 94(5), 2013年, 16頁。
- (33) ルース, 前掲書, 16-17頁。
- (34) Ibid., 123頁。
- (35) William A Dembski and Jonathan Wells, *The Design of Life: Discovering Signs of Intelligence in Biological Systems*, Foundation for Thought and Ethics, 2008, p. xx.
- (36) イアン・バーバー『科学が宗教と出会うとき——四つのモデル』, 藤井清久訳, 教文館, 2004年, 59頁。
- (37) Arthur Peacocke, *Paths from Science towards God: The End of all our Exploring*, Oneworld Publications, 2001, p. 129.
- (38) Ibid., p. 58.
- (39) Ibid., p. 88.
- (40) バーバー, 前掲書, 268頁。
- (41) ホートは2005年のキッツミラー対ドーバー裁判に証人として参加し, IDは科学ではないと述べたが, 同時に進化論は唯物論的世界観を推進しているとして, 双方を批判した。
- (42) John F Haught, *Christianity and Science: Toward a Theology of Nature*, Orbis Books, 2007, p. 52.
- (43) Ibid., p. 105.
- (44) Ibid., p. 61.
- (45) こうした形質の類似を「相似 analogy」と呼び, 共通祖先に由来する「相同 homology」とは区別されている。
- (46) サイモン・コンウェイ＝モリス『進化の運命——孤独な宇宙の必然としての人間』, 遠藤一佳, 更科功訳, 講談社, 2010年, 452頁。
- (47) この論文は2007年のギフォード講演の内容を収録したものである。
- (48) Conway Morris, “Darwin’s Compass, how evolution discovers the song of creation”, In: *Religion and Science*, 2011, p. 334.
- (49) グールド, 前掲書, 12頁。
- (50) Ibid., 16頁。
- (51) Francisco J Ayala, *Darwin’s Gift to Science and Religion*, Joseph Henry Press, 2007, p. 162.
- (52) 松永俊男『ダーウィンの時代——科学と宗教』, 名古屋大学出版会, 1996年, 5頁。
- (53) グールド, 前掲書, 108-119頁。
- (54) ドーキンスの『神は妄想である』の第六章はこうした主張への反論に充てられている。
- (55) リチャード・ドーキンス『虹の解体——いかにして科学は驚異への扉を開いたか』, 福岡伸一訳, 早川書房, 2001年, 8頁。
- (56) リチャード・ドーキンス『祖先の物語』下, 垂水雄二訳, 早川書房, 2006年, 422頁。
- (57) Charles Taylor, *A Secular Age*, Belknap Press, 2007, p. 606.
- (58) 藤井修平「『宗教現象の科学的説明』の考察——認知科学および進化生物学における理論とその背景」, 『宗教学年報』, 30, 2012年, 107-108頁参照。
- (59) チャールズ・ダーウィン『種の起原』下, 八杉龍一訳, 岩波書店, 2007年, 262頁。
- (60) Phillip E Johnson, *Darwin on Trial*, 3rd ed., Intervarsity Press, 2010, p. 33.
- (61) 古谷圭一「キリスト教原理主義者たちはなにを主張しているのか?」, グールド『神と科学は

- 共存できるか?』所収, 2007年, 304頁。
- (62) Phillip E Johnson, *Reason in the Balance: The Case against Naturalism in Science, Law & Education*, Intervarsity Press, 1995, pp. 207-208.
- (63) Ibid., p. 37.
- (64) 鶴浦, 前掲書, 197頁。加えてベーエの『ダーウィンのブラックボックス』の謝辞にもジョンソンの名が見られる。
- (65) とはいえ, ジョンソンは来日した際に NHK の英会話講座で進化論に反対し創造論を教えたことが鶴浦, 前掲書, 118頁に報告されているので, 学術著作上では彼は自らの宗教的姿勢を秘匿している可能性がある。
- (66) Johnson, 1995, p. 196.
- (67) Richard Clinton Dawkins, *The God Delusion*, Black Swan, 2007, p. 84.
- (68) Dembski and Wells, 2008, p. 312. 「designer」の項目。
- (69) Wilson, *op. cit.*, p. 204. 加えてここでウィルソンは科学的ナチュラリズムがこれまでで最良の神話体系であり, 宗教の代替をなすという, まさにジョンソンの主張に適合する見解を述べている。
- (70) Haught, *op. cit.*, p. 133.
- (71) Alvin Plantinga, *Where the Conflict really lies: Science, Religion, and Naturalism*, Oxford University Press, 2011, p. 311.
- (72) Ibid., p. 309.
- (73) Ibid., p. 258.
- (74) 古谷, 前掲書, 308頁では, カトリックの枢機卿が ID の支持を表明し, それに対してヴァチカンから公式の批判が行なわれたことが報告されている。
- (75) エリオット・ソーバー『進化論の射程——生物学の哲学入門』, 松本俊吉, 網谷祐一, 森本良太訳, 春秋社, 2009年, 102頁。
- (76) 鶴浦, 前掲書, 124-131頁。
- (77) バーバー, 前掲書, 30頁。
- (78) Johnson, 2010, pp. 67-85 など。
- (79) Dembski and Wells, 2008, pp. 14-17.
- (80) ドーキンス, 2004年, 第1-7章「仮面を剥がれたポストモダニズム」参照。
- (81) Taylor, 2007. 第7章など。
- (82) 鶴浦, 前掲書, 64頁。創造研究所博物館内の記述からの引用。
- (83) 例えば H・ガダマーの解釈学では, 精神科学の特徴は対象に前もって関わっていることによって「先入見」が存在していることであると述べられており, この先入見なしに, すなわち対象に一切の価値を持たせずに判断を行なうことは不可能とされている。

Religious Discourses Based on Evolutionary Theory: Contemporary Neo-Creationism and its Antagonists

Shuhei FUJII

This paper examines several discourses which are connected with evolutionary theory, including Intelligent Design (ID) and the Theistic Evolution Theory from late twentieth century to the present.

In order to classify these various discourses, the author draws on Ian Barbour's typology of the four kinds of relationships between science and religion: conflict, independence, dialogue, and integration.

In the "conflict" category, ID is a burgeoning theory. According to ID theory, the organisms of living things are too complex for the Neo-Darwinian theory to explain their origin. Therefore, the conclusion that these organisms must be designed by an intelligent designer is drawn. ID is different from the old creationist theories in that there is an absence of theological statements about God or the Bible.

With regard to "dialogue" or "integration", theologians like Arthur Peacocke and John Haught search for the ways to reconcile science with Christian faith. They make some modifications of their theology in accordance with scientific views. These attempts should be called the "Theology of Nature", or in the field of Biology, "Theistic Evolution Theory".

While these theologians articulate their own stance, some biologists have different perspectives. Stephen Jay Gould, a theorist in the "independence" category, argues that science and religion are compatible since they are each preoccupied with their own individual concerns. On the contrary, Richard Dawkins claims that biological "nature" can show an ethical standard, and therefore religion is not necessary for us. He clearly indicates his understanding of the relationship between religion and science to be one of "conflict".

After discussing these various positions, this paper turns to Phillip Johnson's criticism of "naturalism". It states that the "methodological naturalism" which all scientific disciplines presuppose is not compatible with theism. Johnson calls naturalism "the established religious philosophy of America", and he criticizes it for having an overarching influence across academic fields.

In conclusion, the author elucidates the relationship between religion and science in these discourses. When an objection is raised against the Neo-Darwinian theory, any opponent of Neo-Darwinism can use it to support of his or her statement, theory or faith. Thus, academic critics of Neo-Darwinism and various supporters of creationism can be regarded as indirect collaborators. At the same time, it can also be seen that arguments in the field of Biology must address the question of human values.